

映画の「今」を伝える——新聞の映画評の役割

立花珠樹（共同通信編集委員）

1991年から数年間、共同通信文化部の映画担当記者を務めた。その後、管理職となり、思うように取材ができなかった時代もあるが、2008年以降、編集委員として、映画の取材・執筆に再び取り組み、現在に至っている。

4半世紀に及ぶ自らの体験を基に、通信社の映画記者の仕事と、映画評など新聞に掲載される映画関連記事が担う役割について、なるべく具体的に記述し、考察してみた。このことで同時に、映画記者という仕事の意義や、「新聞の映画評」が持つ役割を明らかにし、未来につながる方向性を模索できれば、と願っている。

1. 映画記者の仕事

映画記者になって、一番面白かったのは、撮影現場の取材だ。

今でも忘れられないのは、1992年の2月から9月にかけて撮影された黒澤明監督の遺作『まあだだよ』の現場に、何十回も足を運んだことだ。93年の正月紙面に掲載する特集記事を書くという大きな企画だったため、このような手厚い取材ができた。

映画の撮影過程をじっくり見るのは初めての経験だったし、すべてが勉強になったが、一番驚いたのは、黒澤作品では、映画に映るすべての背景を完璧に創り出すことだった。例えば、主人公の内田百閒夫妻が戦争直後に暮らす掘っ立て小屋を建てるのは当然だとしても、その小屋が立つ道路や周囲の樹木まで、監督の絵コンテに沿って撮影所の中に本格的に造ってしまう。部屋の本棚に並んでいる本も、実際に百閒が読んでいた書籍を調べ、それらをわざわざ古書店や大学の研究室で探し出してくる。完成した映画を見ても、ほとんどの観客は気付かないことなのだが、これが黒澤監督の言う「本物の映画」の撮り方なのだ、と感動した。

撮影現場ではほかにも貴重な思い出が、たくさんある。今ではどの監督も